

令和5年（今年）の大晦日から、松岩寺は
除夜の鐘を夕方5時からつきます。感染症
予防のため一般の方はつけません。
どうしてなのか！

画 佐藤和喜



今年から除夜の鐘は夕方五時につきます。どうしてなのか。大晦日の深夜、百八の鐘をつくという行事が古くからのものではなさそうだから。何百年も続いてきた伝統ならば守らなければいけないけれど、たかだか昭和二十年の戦後にはじまったらしい風習をかたくに守る必要もないので、夕方につきます。なぜ、終戦後の風習かは後で書きます。

こんなふうによく、住職の熱烈なファン（そんなのいるわけない）は、「そうそう、和尚さんの書いた本にもでていたわね」。なんて言ってくれる人がいたり、メチャクチャうれしい。『おうちで禅』（春陽堂書店）の222ページに「悠々と響け除夜の鐘」と題した文章で、「深夜に除夜の鐘をつくのは、歴史の新しい行事である」というのをきちんと証明しています。

この文章の元は、『大法輪』という仏教の総合月刊誌の平成三十年一月号に「除夜の鐘をつく由緒正しい時刻」という文章を寄せていますから、かれこれ五年以上にわたって、言い続けていることなので、軽く浮かんだ思いつきではありません。

『大法輪』誌に寄稿した文章に励まされて？、深谷市の名利・国済寺さんでは数年前から夕方五時から除夜の鐘をついていますし、群馬県の床もみじで有名な宝徳寺さんは九年ほど前から昼間十二時についているようです。国済寺さんは禅宗の南禅寺派、宝徳寺さんも禅寺で建長寺派。調べればまだまだ深夜ではない時間に除夜の鐘をついているところがあるはずだ。

深夜ではなくて、大晦日の昼間、あるいは夕方に除夜の鐘をついたためのエビデンス（根拠）はない。まずは、江戸時代の風俗を伝える落語から。師走の落語といえば『芝浜』。こんなあら筋です。

酒におぼれて働かない魚屋の勝五郎は、芝の浜で思わぬ大金を拾う。これで働かなくていいと喜ぶ勝五郎だが、女房が機転をきかせて、あれは夢だったと言いくるめる。心を入れ替えて酒も断って働いた三年目。嘶しおわるのに、小一時間はかかる大作のラストシーンで、畳を入れ替えて借金取りも来ない閑かな大晦日の夜を過ごす女房が亭主に福茶をすすめます。その時、除夜の鐘が聞こえてくる。

この情景は大晦日の何時頃のはなしでしょうか。江戸の庶民は、「空が白み始める明け六ツが起床時間。町の木戸が開き、店も開く。六ツ半になると大工など職人が出勤して五ツから仕事を始まる。日が沈みきって暗くなる暮れ六ツで、職人は仕事じまい。銭湯に行ってから夕飯を食べる。夜四ツ、木戸が閉まって就寝となる」とは、前法政大学学長を務めた田中優子氏の著書『江戸っ子はなぜ宵越しの銭を持たないのか？』（小学館新書）の記述です。

江戸時代は、一刻（とき）の時間が夏と冬では異なる不定時法を採用していたから、大晦日頃の明け六ツは今の午前六時頃で、暮れ六ツが夕方五時頃。そして、就寝時間の夜四ツは九時半頃になります。『芝浜』の勝五郎は仕事を終えて銭湯へ行き、そのまま長屋へ帰ってきますから、除夜の鐘を聞いたのは午後六時か七時ではないでしょうか。落語のワンシーンだけで、除夜の鐘を大晦日の深夜につくのは邪道だと言いきるのは、少しばかり説得力にかけます。そんな時にヒントを教えてくださいましたのは、旧知の田中潤学習院大学助教です。『江戸町人の研究』（吉川弘文館）に所収されている浦井祥子著「江戸の除夜の鐘について」という論文を送って送ってくれました。

浦井氏は、「明確に江戸時代以前と断定できる俳人・歌人が除夜の鐘を詠み込んだ例」を確かめられないこと。あるいは、日本民俗学の創始者・柳田國男が当時の人は、「日の入りとも一日が終わる。除夜の鐘をきいては昔からの日本人の年の取り方ではない」（『柳田國男全集第二十巻』筑摩書房）と指摘していることなどをあげ、現代人と近世の人びとの生活感の隔たりを説き明かしてくれまます。そして、「江戸時代において除夜の鐘が撞かれていたという事実自体が確認できない」と結論づけ、東京の淺草寺と寛永寺が除夜の鐘を正式につき始めたのは昭和二年十二月三十一日からだと断定します。

ならば、今のような除夜の鐘はいつ頃からどのように始まったのか。浦井氏は論文のおわりで次のように記述します。

「仮に、村などでの地域的な慣習、もしくは民間信仰的な行事などのひとつとして行われていた除夜の鐘という行事が、近代以降に広く全国的に広まったと考えられるのであれば、その方が自然とも言える」。

なあーんだ。除夜の鐘を大晦日の深夜につくのは、それほど長い歴史ではないのか。だから今年から松岩寺は夕方五時から除夜の鐘をつきます。まだまだ感染症が心配なので、一般の方はつけません。